

## 漢字熟語の仮名ふりが良好な再帰性発話を呈した緩徐進行性失語症の1例

- 発話と書字の乖離からみた障害レベル -

金子真人 1) 前川真紀 2) 新貝尚子 3)

1) 都立松沢病院リハ科、 2) 横浜総合病院リハ科、 3) 日医大第二病院リハ科

【目的】再帰性発話 (recurring utterances) は、重度失語症の発話に出現しやすい症候としてとらえられている。しかし、再帰性発話がなぜ失語症に多く出現するのか、あるいは再帰性発話の産生を失語症から説明できるものなのか疑問な点も多い (Blanken, 1991)。再帰性発話を発する全失語の呼称における発語の分析では、語頭音のヒントで正しい発語が可能になる症例の報告 (Howard et al., 1984) や、再帰性発話を呈しても書き取りが良好な例が報告されている (Blanken et al., 1989)。今回、再帰性発話と思われる特異な発話を呈しつつも漢字熟語の仮名ふりが良好な緩徐進行性失語の1例を経験した。本例の発話と書字の成績から、特異な発話を認知神経心理学的に検討した。

【症例】68歳、右利き、女性。1988年頃より代名詞を多用するようになり、「て、に、を、は」などの助詞の使用が少しずつおかしくなった。その後、情緒面でも不安定となり、Pick病が疑われるとともに緩徐進行性失語症と診断された。1992年12月、被害妄想、強迫観念が強く、家族に興奮し怒るようになったため、家庭内での介護が困難となり、松沢病院痴呆性老人精神科専門病棟に入院となった。WAIS 動作性IQは91年6月の検査でIQ74、92年1月ではIQ96を得るなど検査結果にばらつきがみられた。これは意欲の低下や注意障害による一般的な精神症状のためと考えられた。全般的には知的機能に著明な低下は認めなかった。本院入院後の言語症状は、語彙状態が強くなり、聴覚的理解の低下が重篤となった。また、環境音の認知も困難となり、家族の呼びかけにも反応しなくなった。視覚的理解は単語水準で保たれていた。発話面では積極的に他者へ話しかけようとするが、再帰性発話による一方的な語りかけであった。自発話、呼称、復唱、音読のどのモダリティにおいても韻を踏んだように「ごろし - のいの」といった発話がみられた。書字面は、単語水準で自発書字のみが保たれ、仮名書字が漢字書字に比べ良好であった。

【方法および結果】「100単語呼称検査」の自発書字、呼称、仮名音読、漢字音読を行った。また、漢字熟語(2から3文字熟語1588語、4文字熟語133語)の仮名ふりを行った。さらに、仮名ふりが可能であった4文字熟語について、反対に仮名ふりを漢字に変換する課題を施行した。

「100単語呼称検査」の自発書字は63語に正答した。呼称、仮名音読、漢字音読に正答はなかったが、語頭音のみが正しく発話されている場合があった。例：呼称(電車) 「でごろしの・・・ごろし - の」、仮名音読(せびろ) 「せごろし - のごろし - のいの」、漢字音読(すし) 「すごろし - のいの」。

3文字以下の漢字熟語1588語の仮名ふりでは1210語に正答した。4文字熟語133語では85語に正答した。また無反応はなかった。誤反応例：国会 こくかい、下流 げりゅう、民衆的 みんしゅてき、取捨選択 しゅすてるせんたく、日進月歩 にっしんがっぽ、弱肉強食 よわにくきょうにく。また、仮名ふりが可能であった4文字熟語(85語)の仮名文字を漢字に変換する課題に正答はなかった。

【考察】日本語の言語情報処理を考えた場合、仮名ふりにみる書字過程は音素列を經由して仮名文字が書かれることが知られている (Sasanuma, 1986; 辰巳, 1988)。本例は、例えば「試行錯誤」という漢字熟語を呈示した場合、発語では「しごろし - のいの」といった再帰性発話を認めた。一方、仮名書字には『しこうさくご』という正しい仮名ふりがなされた。本症例が正しく課題語の意味抽出をしているか否かは明確でないが、仮名書字が可能であることから音素列生成は障害を受けていないことが考えられる。また、仮名音読、漢字音読、呼称などの発話において、

目標語の語頭音のみが正しく発語される傾向がみられた。これは仮名書字が正しいことから、目標語の音韻表示を正しく生成している可能性が考えられる。発話と書字の乖離から本例に認められた無意味再帰性発話は音素列生成から発語に至る過程に障害が侯定され、失語症のみでは再帰性発話の産生が説明できなかった。